

# 物理学会 日本語断ち

## 世界にらみ「英語だけ」

科学の世界で英語が「共通語」となり、英語による情報発信の必要性が高まる中で、日本物理学会（会員約1万9千人）は、今秋の定例大会の一部を「日本語禁止、英語のみ」にする。100年以上の歴史があり、国内の多くの大学に会員がいる老舗学会の決断は、ほかの学会にも影響しそうだ。

### 大会の海外から参加も期待 4発表会

今秋の大会は国内2カ所での開催で、前半はすでに終わった。20日から岡山大で開かれる後半の13分野のうち2分野で、計四つの発表会（セッション）を英語だけにする。会場からの質疑もすべて英語だ。

同学会は、これまでも

英語での発表を受け付けてきたが、実際には大半が日本語で、参加者もほとんどが日本人。今回の試みには、日本人研究者の英語力を高めるだけでなく、海外からの参加を増やすねらいもある。

担当理事の谷村吉隆・

京大教授（化学物理）

は、発表希望者が二の足を踏むことを心配したが、予想を超える30件の応募があった。留学経験のある日本人からのものが多かった。

国内の学会では、英語使用が少しずつ浸透して

いる。たとえば、日本循環器学会も一昨年から英

語のみの発表会を設けた。ただ、年に約50学会の運営補助をしているジエイコム（大阪市）によると、英語発表の学会は最近扱ったうちの1割足らず。それも「原則として」で、日本語発表も交じっていたという。

日本物理学会長の潮田資勝・東北大学教授（物性実験）は「今は英語で発表できない研究者は通用しない。将来は全分野に広げるとともに、国外からの参加率も1割くらいまで高めたい」と話している。